



上:朝食はビュッフェ方式だが品揃えはごく貧弱。
下:この日の朝食はこれとミルクコーヒーだけ。

3. パンノンハルマ 路線バスの降り方

11月3日は、久しぶりに青空が戻ってきた。8時に朝食を済ませ、9時を過ぎたところで早めだがチェックアウトした。二泊の料金は24,000Ft(8,815円)で、クレジットカードで支払う。

バスステーションへ行く前、メインストリートに迂回してスポーツ用品店を探す。アーミーナイフがないと何かと不便なのは昨夜の経験でも明らかだ。知らない街でものを買おうとすると、中々適合する店が見付からないものなのに、なぜかこの朝は通りを

100メートルも歩かないうちに登山用具を扱う店がある。スポーツ用品店でもサッカーやテニスの用具が中心であればナイフなど無いかもしれないが、登山用具ならば期待できるのだ。

さらに幸運だったのは英語が通じることで、店頭近くに展示されていたナイフは単機能かちやちやなものばかりだったが、望みのものを下手な説明で伝えたところ、それならばと案内されたコーナーにはアーミーナイフそのものが10種類以上並んでいた。

最初のコーナーにあったアウトドア用(?)スプーンも役に立つかと購入。スプーン490Ft(180円)、ナイフ8,990Ft(3,302円)。思いがけず簡単に欲しいものが手に入り、唯一のデメリットはバスステーションでの待ち時間が予定よりずっと長くなってしまったことだ。

ともかくバスステーションへ行きパンノンハルマ・ヴァーまでの切符を買う。距離は23キロ(のちにグーグル地図で測定)で料金は465Ft(171円)だった。後は待つばかりだ。最初は待合室で、しかし快晴なので表で待った。次第に待ち人も増え、ほぼ定刻にバスが来たときは20人ほどになっていた。

長い時間待った甲斐があったというべきか、最初に乗り込んで右側最前列に座れる。この位置が一番視界良好で、撮影にも好適だ。全員が乗車するのを待ち、グーグルのアウトプットしたルート案内を運転手に示す。降りる場所を教えてくださいよう頼んでみたが、英語が通じたか疑わしかった。



荷物の運搬方法。キャリーカートに付け、上にデイパックもぶら下げてる。



バスステーションの切符売り場、行列していたが時間に余裕があったので焦らず済む。



定刻ピッタリに発車したバスはこまめに停車を繰り返す、すぐに満員状態になってしまった。こうなると荷物を全部車内に持ち込み、他の乗客に較べ余計な空間を占拠しているのが心苦しい。

ともかく体を縮めるようにしてカバンを引き寄せ、窮屈にせよ一人分の座席を空けて、そばに立っていたオバサンに坐って貰った。

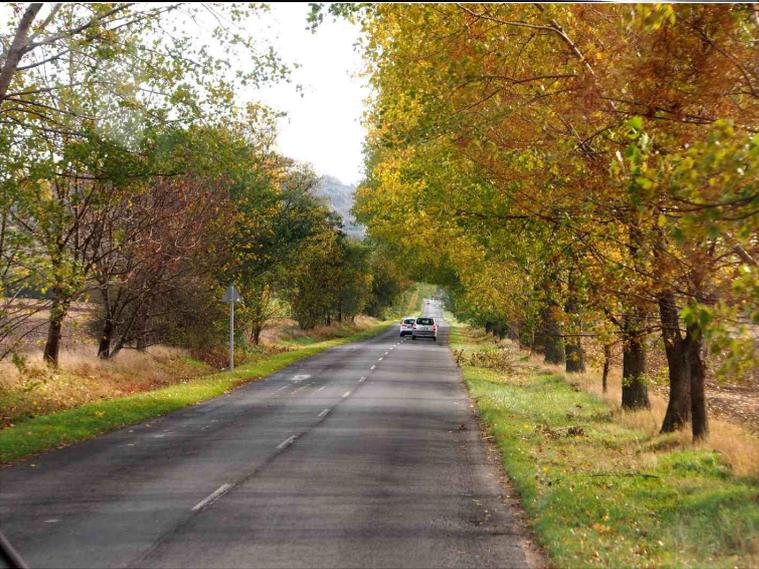
平坦な農地の間を直線かごく緩やかなカーブを半時間ほど走ったのちに街道から別れると、一段と長閑な道になった。遠望される丘の上にある建物がパノンハルマ修道院らしい。5分ほどで村があり、乗客の大半が下車した。そこから10分ほどで丘陵を登り始め程なくゲート前で停車する。辺りには観光客らしい姿が10人以上いた。

此処が終点だといわれ困惑する。丘にさしかかってから人家らしいものはなく、宿がこの近辺だとしても、どちらへ踏み出したらよいのかさっぱり判らない。仕方ないのでもう一度グーグルのルート案内を運転手に手渡し、どうしたらよいか尋ねた。彼はうんざりしたような様子をあからさまに見せながら、それでも手にとって一通り目を通すと、このままバスに乗っていると身振りで示した。

5分ほどして発車すると、先ほどの道をそのまま逆戻りし、大勢が下車した村の四つ角で止まる。再び身振りで、あの角を右へ曲がれといったメッセージを残し、バスは走り去った。

いよいよグーグルから印刷した地図が役立つはずだったが、現在位置が地図上のどこと対照できるか判らざうろろする。下車地点から目指すパンジオ・エッタラムまで、僅か150メートルなのに6分もかかってしまった。

ようやく辿り着いてみれば、今度はゲートが閉まっているので中には入れない。このような場合、通常は呼び鈴やインターホンがあるのに、これが見付からない。どうしたも



上: 主要道(82号線)前方を横切るのは自動車専用道路M1号線。
下: パノンハルマに枝分かれしたローカル道路。



道路からみたパンジオ・エッタラム。門の右に見える鉄格子ゲートが電動で左右に動き開閉される。右手の建物が食堂で奥の赤い屋根が宿泊棟



のか思案していると、突然モーターが動き出し門がスライドして開く。監視カメラかあるいは目視で訪問者の存在に気付いたらしい。

駐車場を兼ねた庭に入っていくと戸口から30前後の女性が姿を現した。身長180センチ弱で90キロぐらいだろうか。愛嬌のある笑顔を浮かべて話しかけてきたが、英語はかなりのカタコトだ。話ながら先に立って庭を横切り、奥の建物の中央にある扉を開けた。これが宿泊棟らしい。

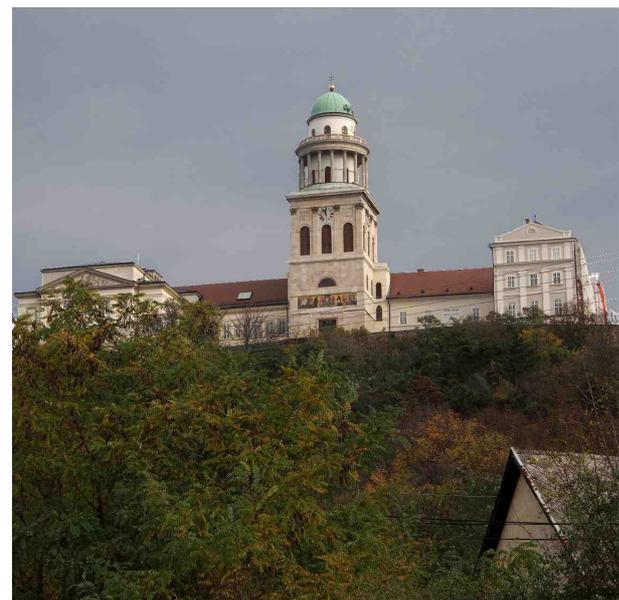
二階へ上がり、右側で突き当たりの部屋が提供された部屋だ。広さは10畳ほどでベッドが4台置かれている。建物自体が新しく、従って設備も真新しかった。満足旨を伝えると、鍵を渡してくれる。



上:泊まった部屋。右手のガラス張りドアをでるとテラスがある。
下左:書斎スペース。右:浴室

彼女が去った後改めて部屋の印象を確かめると、あまり居心地が良くない。原因はすぐに判った。窓が小さく比較的高い位置にあり、おまけに窓辺に立っても隣接する建物に視界が遮られている。その結果として部屋にいると閉塞感が強いのだ。眠るだけの部屋ならば別段構わないけれど、二泊して昼間も部屋で寛いで過ごすつもりだから、もう少し交渉することにした。

先ほど彼女が出てきたドアをノックする。ドアが開くと彼女の背後には大型洗濯機があり、洗濯中だったのか手を拭きながら用件を尋ねる。希望するところを伝えると、にっこり笑いながら、「それはそうね。」と同意し、すぐ別の鍵を取りに行った。今度の部屋は二階左側の突き当たりで、テラスが付いている。窓は先刻の部屋と同じ大きさなれど眼下には中庭があり、そして遠くまで視界は広がっている。テラスに出てみると椅子とテー



テラスから見上げる修道院。

ブルがあり、斜面の上方に修道院が見えた。テラスへのドアもほぼ全面ガラス張りなので、部屋の中から芝生や別棟が見える。やはり中途半端な妥協をしないで良かった。

彼女が去ったところでデイパックからネットブックを取り出しメールをチェック。此処もWiFiで簡単にインターネットに繋がった。数通受信があったものの重要だとか嬉しいようなものはない。時計をみるとまだ12時ちょっと前だ。随分あれこれもたついたりしたけれど、ジュールからの移動に時間を取られなかったこともありまだ早い。昼飯昼酒の前に修道院を下見することにした。

ハンガリーの世界遺産

文化遺産

1. ブダペストのドナウ河岸とブダ城地区およびアンドラーシ通り
2. ホッローケーの古い村落とその周辺
3. パンノンハルマの千年の歴史を持つベネディクト会大修道院とその自然環境
4. ブスタのホルトバージ国立公園 | ペーチの初期キリスト教墓地遺跡
5. フェルテー湖 / ノイジードル湖の文化的景観(オーストリアと共有)
6. トカイのワイン産地の歴史的・文化的景観

自然遺産

1. アグテレク・カルストとスロバキア・カルストの洞窟群(スロバキアと共有)。

パンノンハルマ修道院

宿泊棟から庭へ出ると先ほどの彼女が食堂棟から出て来る。こちら辺の平面図があれば欲しい旨を伝えたが、「そんなものはない。前の道を右へ行けばそのまま修道院まで行けるから、地図などは必要ないの。」とのことだ。確かにその通りだろうし、英ガイドや日ガイドに地図が掲載されていないのも同じ理由だと思う。しかし他所者で、特に私のような方向音痴が初めて訪れたとき、P.43に掲載した簡単な地図が事前に入手できていれば、どれほど心強く有り難かったことか。

それはさておき、云われた道路はバスを降りた四つ角から上ってきた続きで、舗装されセンターラインこそないものの相互一車線だった。坂道を登ること10分弱。

途中で往来する車は乗用車ばかりが二、三台ほどだったし、薄雲を通して来る陽光と若干冷涼な微風は歩くのに快適な環境を作ってくれる。

次第に視界が広がり、標高差にして60メートルほど登ったところで丘陵の肩にでた。正面にツーリストセンターやレストランのビル、駐車場などがある。此处からは車道と遊歩道が別れ、東へ300メートルばかり行くと、先ほどバスが折り返した広場があった。この広場に面して正面ゲートがある。

ゲート脇のパネルには英語その他で、修道院はベネディクト会に属するもので、内部の許可された部分はガイドツアーだけで見ることができる。ツアーはツーリストセンターから出発することなどが掲示されている。しかし内部は明日見ることにして辺りをしばらく散歩した。

修道院が建つ丘は脊梁部が南へと延び、此处には歩道が設けられている。遊歩道としては雰囲気がありそうでこれを辿ってみた。修道院付属のワイナリーや小振りで瀟灑な教会などがあった。しかしどちらも扉は閉ざされている。半時間弱で踵を返した。



修道院正面ゲート。



上: 修道院の丘から見下ろすパンノンハルマ村。
下: 脊梁部歩道から眺める修道院。



上:パンジオ・エツタラムの道路側外壁。ハンガリー語、英語、ドイツ語、日本語で歓迎の言葉が書かれている。ちなみに外国々旗は日本だけだ。下:客席。



ツーリストセンターにいた猫。人に馴れていて毛並みも良いので飼猫か。

ツーリストセンターによってガイドツアーのスタート時刻などが明日どうなるか訊いた。日曜日で午前中はミサがあるため、9時、10時のツアーは図書館しか見ることができないようだ。深い考えなど無く、ついでによっただけだったので得したような気分になる。

修道院の下見を終えて時刻は1時近くになっていた。今日はこれ以上あれこれする目標もなく、昼飯昼酒の後は昼寝その他で怠惰に過ごすつもりだ。登ってきた坂道をそのまま戻る。バスで修道院まで来てしまったとき、この道を迎れば良かったわけだが、それは結果論で実行するのは無理だったと思いながら下る。相変わらず高曇りだけれど、午前中より雲はいっそう薄くなったようだ。明日の好天気期待される。

パンジオ・エツタラムまで戻り着き、ゲートの山側にある建物の外壁に歓迎の言葉と絵が描かれていることに気付いた。日本語もある。食堂の席数が多く駐車場も大

型バスが駐まれるから、世界遺産見物の前後に此处で食事するツアーも多いのだろう。

一旦部屋へ戻ってデイパックを置き、トイレを済ませてから食堂へ向かった。一段高くなった部分も合わせると、80席はありそうだが先客はいなかった。やはりシーズンオフのせいだろう。英文お品書きを捲り、マッシュルームスープ、鴨のレバー、ビタミンン・サラダを選びワインはトリコリシュにした。

このワインは修道院で近年ワイン造りを再開したブランドで、三種類の葡萄を使用していることに因むらしい。しかしこんなことはつゆ知らずで、注文を取りに来た(ウェイターと云うよりこの宿のオーナーに見えた)オヤジに奨められるまま決めたものだ。

スープとワインは待つほどもなく運ばれてくる。ワインは飲みやすくスープも美味かったもののそれ以上特筆するようなことはなかった。続いて登場したサラダは盛り付け方が洒落ていると思うが、



上:グヤーシュ。下:パノン・サラダ。

味についてはごく一般的なものだ。

メインは意外に早く10分遅れで登場した。ハンガリー風グースレバーのフライ。レバー料理は下ごしらえで血管などの筋っぽい部分を丁寧に取り除いたものを、適度な加熱具合で固すぎず上々の仕上がりになっている。鴨のレバーを食べるのは初体験だったが美味かった。ジャガイモの付け合わせもレバーの方に使用されているドミグラス系のソースを絡めて食べると適度な味わいになる。レバーと一緒に煮てある小粒のグリーンピースも良かった。

食事中に家族連れが一組入ってきた。夫婦と男女の子供で隣のテーブルに席を占める。オヤジが厳つい顔なのに娘は可愛かったので、隠し撮りではないがさりげなく撮影した。

最後はカプチーノで1時間弱の食事を締める。勘定はスープ450Ft(165円)、鴨のレバー2,990Ft(1,098円)、サラダ390Ft(143円)、コーヒー440Ft(162円)、ワイン1本2,600Ft(955円)で合計6,870Ft(2,523円)だった。部屋へ戻り一眠りする。

目覚めると4時近かった。散歩がてら村を見物に出かける。先ほどバスを降りた四つ辻は、食料



ハンガリー風グースレバー。



隣のテーブルに女の子。

品店や食堂などがあり村の中心的な雰囲気だった。しかしどこも閉まっている。土曜日のせいだろうか。今晚飲む酒はあるものの、明日の日曜日も店が閉まっていると足りなくなる。いざとなればこんな場合に備えたスキttlに詰めたスピリタス(アルコール度数96のポーランド製ウォッカ)があるのだが。

村を縦貫する(先刻バスで通過した)道をジュールとは反対方向へ辿る。バスから見た数軒の民家が茅葺き屋根だったので近くからゆっくり見たかった。

バスで走ったのですぐ近くのように錯覚していたが、四つ辻から1キロほど離れていた。先ほど瞥見したときの印象より遙かに重厚で良く手入れ



パンノンハルマ村の茅葺き民家。



ハンガリーで飼い犬はよく見かけるが、野犬や放し飼いはい少ない。愛想の良い子が多く、犬好きとしては嬉しくなる。

されている。日本だと茅葺き屋根の葺き替えには数百万掛かるそう。最も人件費がそのほとんどのことなので、こちらでならば随分安くでき

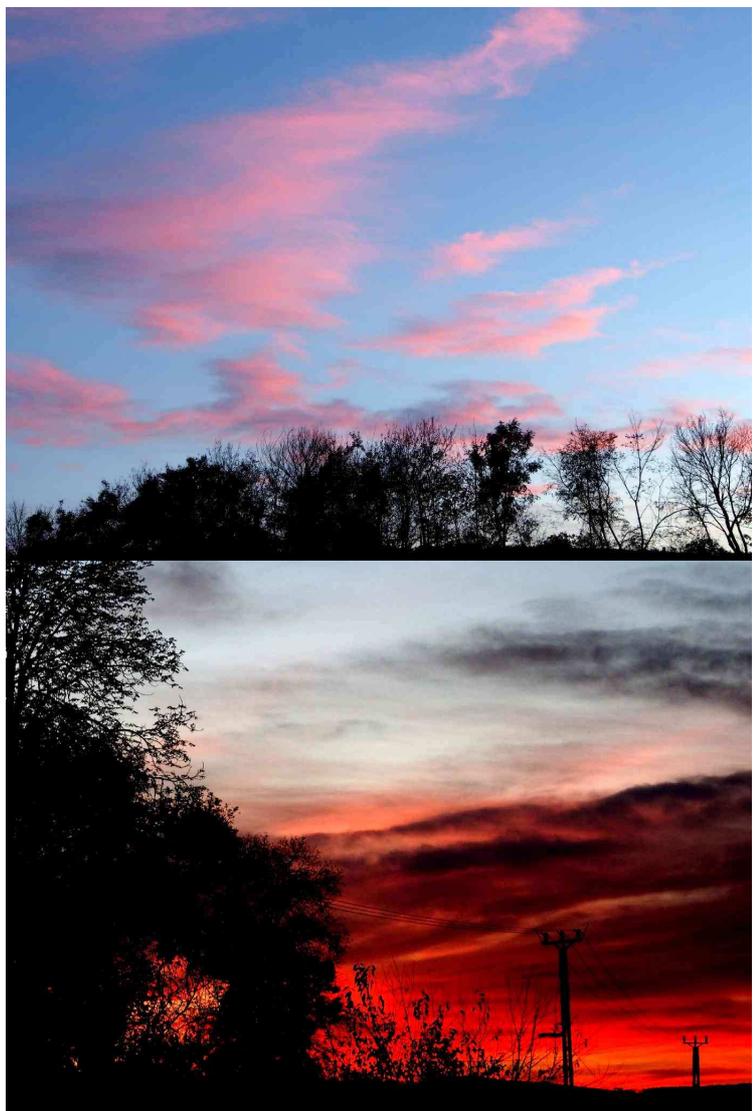
るのかもしれない。しかしそれでも個人で負担するのは大変だろう。日本では地域の景観保全を目的とし、茅葺き屋根の補修に補助金を出す自治体もあるから、ハンガリーにもそのようなシステムがあるのだろうか。

茅葺きを見物しているうちに始まった夕焼けが次第に美しいものになって行く。明日の好天を約束しているのだろうか。これを撮影するのにしばらく専念する。夕焼けに限ったことではないが、変化のあるものを撮っていると、先ほどより今の方がひょっとしてより良いような気がして撮り直す、そんなことが繰り返される。幸いデジタルカメラだと撮影コストはないに等しいけれど、逆に後で使用する画像を選別するとき、似たようなシーンが延々と並ぶことになり、うんざりする。

4時47分に撮ったショットで夕景撮影を切り上げた。黄昏て次第に無彩色になって行く風景の中を宿へ向かう。結局開いている食品店はなかったので、晩酌のツマミが不足気味だ。宿は食堂も兼ねているが、この時期は営業時間が正午から5時までだとチェックインするとき云われている。

宿のすぐそばまで戻ったとき、道を挟んで反対側にある軽食堂の室内に灯りが点っているのが見えた。出掛けに看板に書かれた、「ピザ、ドネル、サラダ、デザート」などを見てマークしていた店だ。

中に入ると十代後半の男女で賑わっていた。連中は盛んに飲み食いしながら歓声を上げているが、長居をするつもりはないから苦にならない。ドネルケバブを持ち帰り用に注文した。



夕焼けが美しかった。

ドネルなど通常であれば数分で包み上がるはずが、なぜか10分以上も待たされた。別に急いでしたいこともなかったから、多少ジリジリしながらもおとなしく待つ。勘定は990Ft(364円)で、此处もカードで支払った。後でレシートを見ると220Ft(81円)の項目があり、持ち帰り容器らしい。単にアルミ箔でくるんだだけであったが、それにしては割高だと思う。

これであとは飲むだけだと、宿のゲートに着いたのは5時20分だった。午前中同様ゲートが閉じられている。呼び鈴などないのは先刻調べているし、暗くなった今さら調べ直す気にもならない。揺すぶって多少音を立ててみても全く反応はない。

こうなれば乗り越えるしかないのかと思うが、出来ればそんなことはしたくない。そんな時点で幸運なことに、食堂にいた最後の客達が出てきて、彼等を出すためにスライドドアが動き出した。彼等と擦れ違うように中へ入り、食堂を覗いてみるとまだオーナーらしいのがいる。彼の所に行って文句を云うと、渡された鍵を出せと云う。キーホルダーに着いた小さい方で門を開けることができるらしい。しかし受け取ったときにはなんの説明もなかったし、鍵のセットを見てそこまで読み取れるほど勘は働かない。

同宿者は1階に二組泊まったようだ。しかし僅かに人影を見たのと、表に置かれた小テーブルの灰皿でその存在を感じたものの、至って静かだった。表の通りも夜はもちろん、夕刻から車輛の往来がない。そんなことで晩酌を終えると、それから眠りを妨げるようなものが丸でないまま翌朝を迎えた。



ドネルケバブ。

修道院ガイドツアー

11月4日は昨日の夕焼けが予告した通りの晴天だった。朝食は7時から9時の間だと云われていたので、早起きでせっちな性分としては早々と7時ちょっと過ぎに食堂へ向かった。品揃えは少ないものの質実で充分、日本の一部ホテルで見られるような食品廃棄が大量に発生しそうな並び方より良いと思う。ロールパンとスライスしたハム、ソーセージ、チーズなどにゆで卵を取った。オバサンが飲み物を訊きに來たので、カプチーノを頼む。

この日は修道院内部見物が主たるテーマだけれど、昨日の下調べから11時以降のガイドツアーにする。それまでの空き時間を利用して、9時半から鉄道駅の調査と酒の調達に出かけた。ガイドブックに地図がないので、グーグルの地図で駅と宿の位置関係や距離を調べられるのが有り難い。



宿の朝食は品揃えが少ないがビュッフェ方式。



踏切。下の3枚はいずれも警告標識だが、踏切に近づくに従い、線が減って行く。



ビデオ放映で日本語字幕表示。

修道院で共に暮らす他のメンバーも大きな役割を持っており、

気温は13℃で、風がなく陽射しがあるから歩くには快適だ。駅へ向かう途中にスーパーマーケットがあり、客が出入りしている。これで酒を調達できる見込みが付き、念のために営業時間を調べた。日曜日は午前11までなので、駅からの帰り道によることにする。ちなみに開店時刻は7時で、平日ならば6時に開店だ。日本人の感覚からすると異常に早い。

スーパーからちよつと行ったところで観光案内所を見かけたが、シーズンオフ休業中だった。もっとも仮にやっても取り敢えず訊きたいようなことはなかった。

宿から20分弱で駅に着いた。較べればバスよりも鉄道が好みだけれど、バス停までならば5分かからない。どちらにするか決めたわけではないが、バスの可能性が高そうだ。数枚撮影後に踵を返す。先ほどのスーパーマーケットに立ち寄り、酒を調達しようとしたが見付からない。ワインやビールはあるもののスピリッツの類は置いてないらしい。もう一度棚を風潰しにチェックし諦めた。ミネラルウォーター1.5ℓが141Ft(52円)だけ購入。

修道院の外国人向け(英語)ツアーは11時からなので、一旦宿へ戻って一休み。10時半に再出発した。しかし11時はマジャール語のツアーで、ツーリストセンターで半時間ほど待たされることになった。

外国人向けツアーの料金は2,500Ft(918円)で、500Ftほど割高になっている。最初にセンターの3階にあるホールでビデオによる修道院の歴史その他の解説が流された。英語のアナウンスだが、日本語の字幕も表示された。これなどは最近のIT技術進歩の恩恵だろう。

同じグループとなったのはリアニアからの若いカップルで、ガイドを含め4人だった。日曜日なので混雑するかと思っていたが、予想外の展開は歓迎だ。10分ぐらいでビデオ解説が終わり、いよいよ修道院へ向かう。3階のホールを出ると下へは降りず歩道橋で自動車道路を跨ぎ、対岸斜面の遊歩道へ渡った。

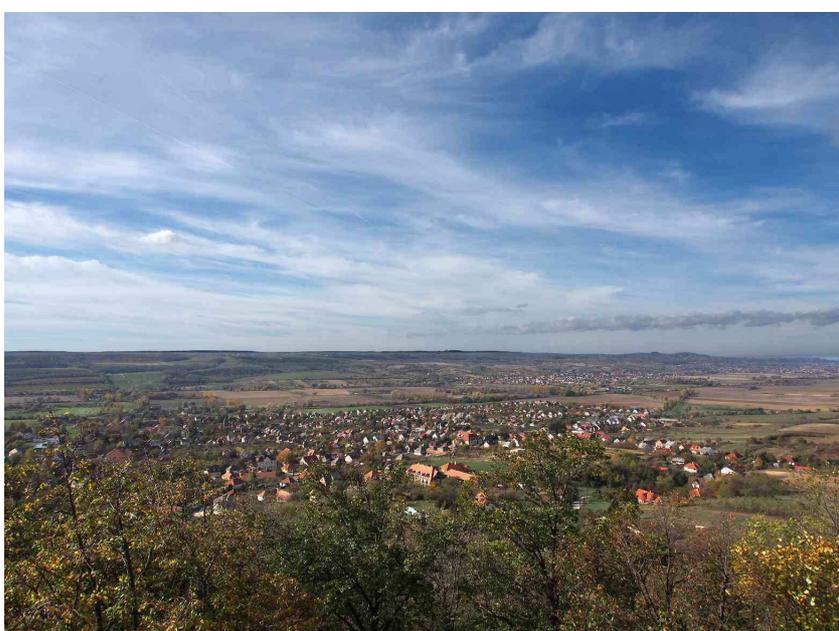
5分ほどで正面ゲートの所へでた。昨日バスが折り返した広場だ。ところが此処でなぜかドイツ人らしいカップルとハンガリー人らしい3人が合流する。



修道院正面ゲート。

ガイドは40前後の小柄な女性で、英語を話すのは当然としてドイツ語から、そして日本語も、「撮影できますが、フラッシュは駄目です。」などカタコト以上喋る。どこで習得したのか、大したものだと思う。フランス語やイタリア語、スペイン語なども出来そうな感じだ。

彼女の後に従って修道院の敷地をほぼ横断して東端に達する。ほぼ平坦だった敷地は此処から崖になり、かつて修道院が要塞化していたときは城壁として機能していたらしい。



東端の城壁からパンノンハルマ村を見下ろす。

振り返ると聖マーティン聖堂の鐘楼が青空を背景にすっと聳え、その真下が聖堂への玄関だった。玄関上のモザイクや扉を覆う銅板に施された彫刻などに関する説明がなされたものの、ほとんど記憶に残っていない。語学力の問題もあるが、あまり興味を惹かれなかったせいだ。

此処は996年に建設が開始され、ハンガリー最古の修道院なのだ。けれども創設以来此処を拠点として活動したベネディクト会は、オスマントルコがハンガリーを支配していたあいだ退去せざるをえなかった。そのためこの聖堂を初めとする主要な建物は、18世紀にトルコが撤退したのち建設が開始され、20世紀初頭によく完成したものもある。この新しさと、さらに(多分)資金的な問題も絡んで、見てもあまり感心したり圧倒されることがないのだった。

玄関を入ると簡素な拝廊があり、1224年と1740年の修道院スケッチが壁に掛けられていた。二つの間に起こった変化も大きい。1740年の建物から現在のそれも随分違っているようだ。拝廊の端から身廊へ入る。日ガイドによれば、「12世紀末のハンガリー初期ゴシック様式で修復」とのことだ。

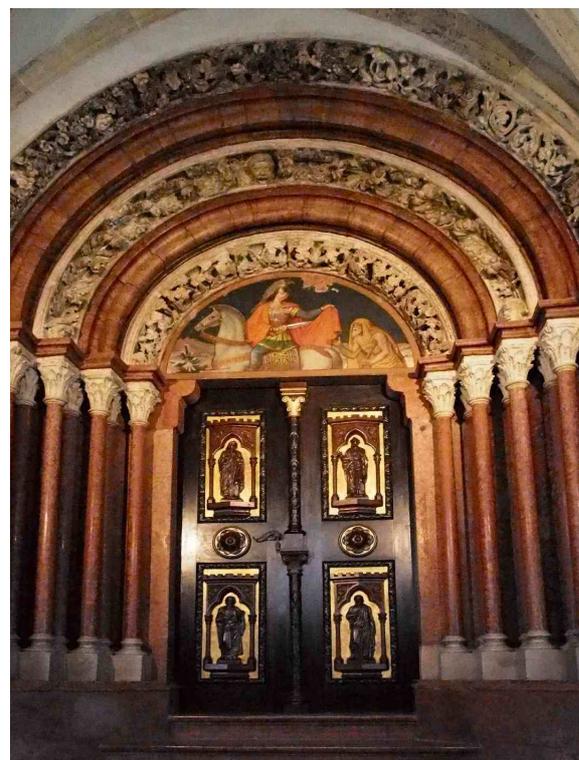
飾り気のない太く丸い石柱が壁のように側廊とを隔て、窓は極端に小さい。現在は電灯により人が動くのに差し支えない程度に照明されているが、往時は随分使い難かっただろうと思う。



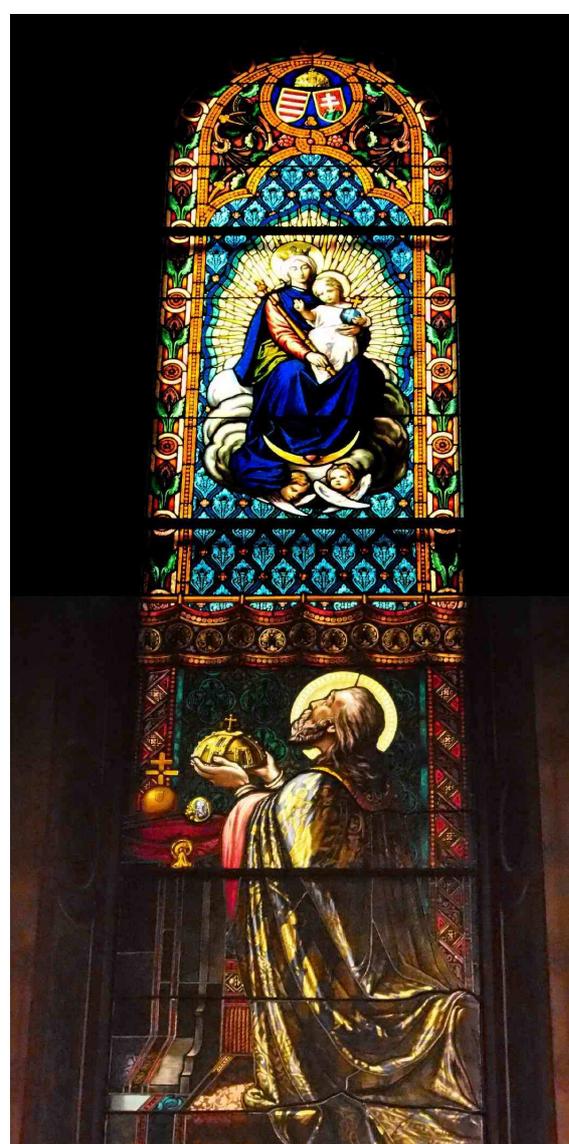
聖マーティン聖堂の身廊。



聖マーティン聖堂への入り口。



聖堂の側廊に通じる修道院内部からの入り口。



聖イシュトバーン礼拝堂のガラス絵。ハンガリーの王冠を誰に授けるべきか聖母マリアに尋ねるイシュトバーン。

聖堂の内陣地下部分にはこの修道院で最も古い部分でやはり礼拝堂がある。霊的なものには鈍い方なのであまり如実には感じないのだが、一種のオーラが漂うようなところだった。ガイドの説明も短く終わり、しばらくの間は沈黙がその場を満たす。

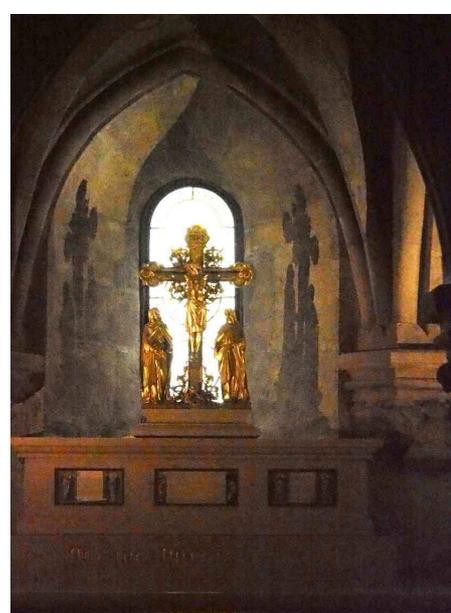
地下部分から戻り、聖堂の横に抜けると聖イシュトバーン礼拝堂がある。いつ頃作られたものか、説明を聞き逃したがそれほど古くないような気がした。しかしステンドグラスを思わせるようなガラス絵のテーマは、「ハンガリーの王冠を誰に授けるべきか聖母マリアに尋ねるイシュトバーン。」で、これは同じテーマのものをブダペストの聖イシュトバーン大聖堂でも見ている。ハンガリー人からすれば、自国の歴史や自らのアイデンティティーに重ねて感慨深く見るのかもしれない。しかし私のような異邦人でおまけに無宗教だとなれば、何か違和感を感じるのだった。

聖イシュトバーン礼拝堂を出て聖マーティン聖堂に平行する廊下で図書室へ向かう。途中に聖堂とを隔てる壁がえぐられたようになり、ガラスが嵌め込まれたところがあった。20世紀初頭の工事中に見付かった初期修道院の壁とのことだ。この修道院のように幾たびもの改修や増築を経てきた建物は、最古のものを貴重と違って

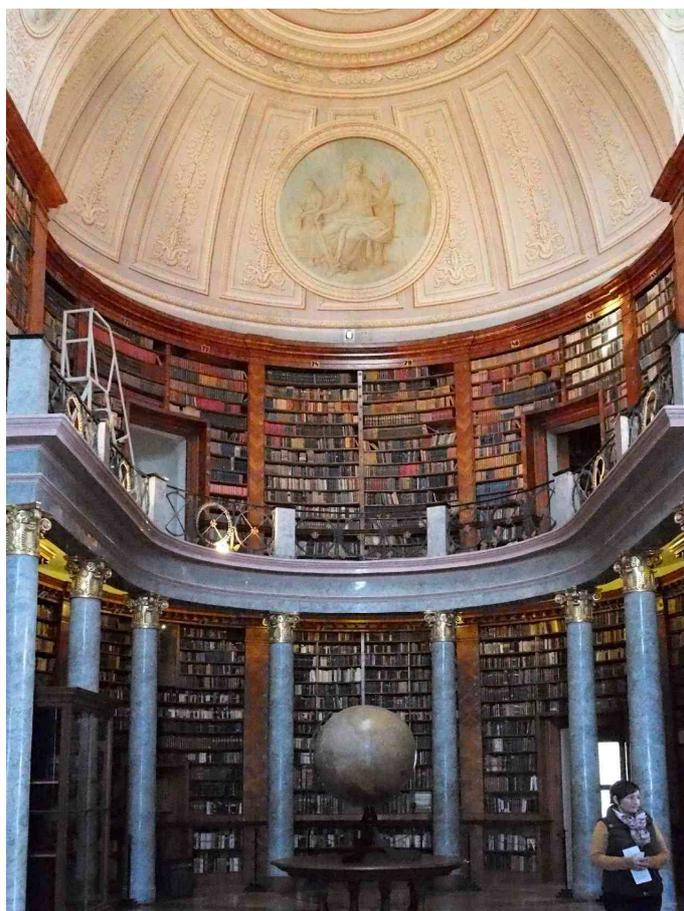
も単純にそれを発掘すればよいとは行かないようだ。

図書室は36万冊の蔵書がある。これは古代ならばアレキサンドリアの図書館70万卷や、現在に繋がるものではトリニティカレッジ図書館の500万冊があり、こんなと較べればだいぶ見劣りがする。しかしヨーロッパの辺境において一修道院が収集したことや、さらにオスマントルコ時代にその活動が大幅に制限されたことなどを考えれば随分健闘したと云えるのだろう。

此処のように古くから連綿と続いている図書館の蔵書は、単なる書籍と云うよりも何かしら呪術的なものを感じてしまう。かつて修道院は知識を独占する存在だったしそれを象徴するの神殿が図書館であり、その神具や祭具に当たるのが蔵書だから、単に知見を書き連ねて綴じたものではなかったはずだ。そして印刷技術が広まるまでは、オリジナルでも写本にせよ総て手書きされ手



内陣地下の最も古い礼拝堂。



図書室。

造り製本されていたこともこの効果を高めているだろう。

しかし書架は5メートルくらいの高さがあり、二階はさらに足場が狭いから上の方に収められた書籍を取り出すのは大変だ。数冊の本を見比べて、求める内容に適したものを選ぶなどは困難きわまりないと思われる。けれども考えてみれば往時の書籍が持っていた権威は、「比較して選ぶ」などは拒絶しただろう。具体的には(おそらく)閲覧そのものが厳しく制限され、煩雑な申請手続きを経てようやく許可され、読むことが出来るだけで有り難いと思う、活版印刷以前であればこんな状況だったのだろう。

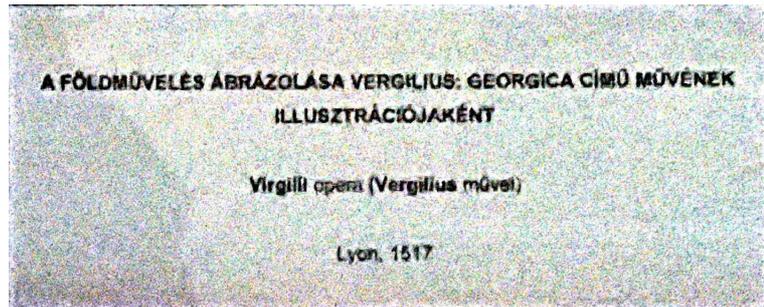
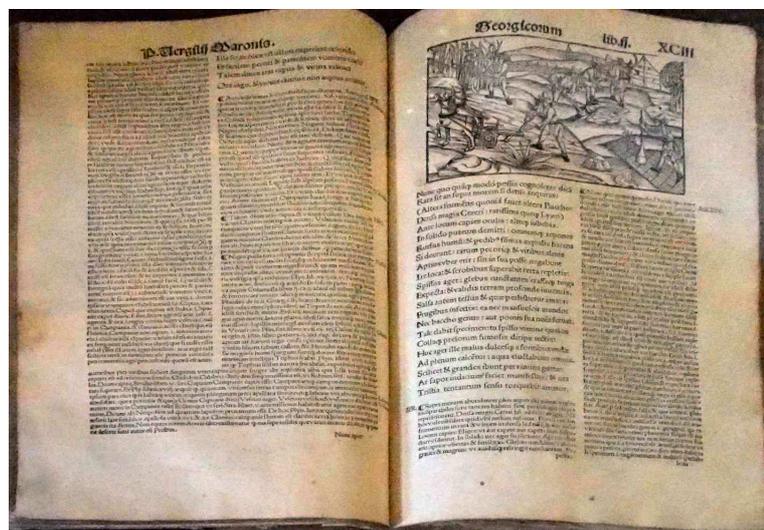
蔵書中で特に価値が高いとされているのが公文書関係で、1055年に創建されたティハニ修道院の創立文書も此処に保管されている。ちなみにこの文書は現存するマジャール語文献では最古のものとしてされている。

この修道院が世界遺産として登録された評価点に図書館も入るかと思っただが、ユネスコの登録理由ページ(インターネット上の英文)には、少なくとも図書館に関する直接の言及はないようだ。ちなみに登録理由のカテゴリーとしては

- (4) 人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例。
- (6) 顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と直接または明白に関連するもの。

が挙げられている。

図書館の次は地下へ降りる。ギャラリーと土産物や記念品などが並ぶ売店があり此処で自由解散となった。一応ギャラリーを見物したものの、印象に残るものはなかった。売店を通過するとすぐドアがあり外部に出る。此処も修道院の敷地内なので勝手に入ってくることは出来ないが、ガイドツアー終了後、辺りを歩き廻るのは制限されていないらしい。宿へ戻ろうかとツーリストセンターの方へ歩き出したが、時刻が1時前なのでもう少し修道院周辺の丘を歩き廻ることにした。



16世紀の写本。上: ページを見開いた状態。中: 部分拡大。下: 説明カード。



展望台から北東遙かに風力発電施設が見えた。

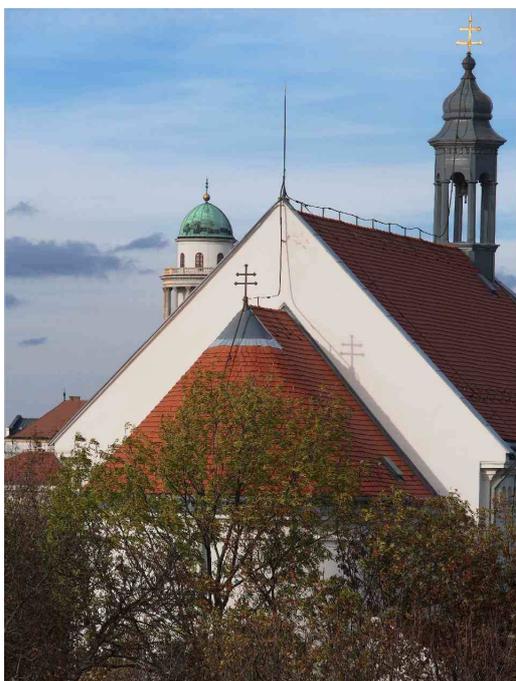
結局昨日と同じ丘の脊梁部を南に向かう。瀟洒な聖母教会は相変わらず扉を閉ざしたまま。さらに南へ向かうと緩い下り坂になり、しばらく行った平坦地に角材を組み合わせて作った塔のような展望台があった。一応7階建てで高さはおおよそ20メートルほどだろう。



展望台。

(「馬鹿と煙」なので)高所は好きだし、どんな景観が望まれるのか興味を惹かれ階段を登る。一番上の展望階には先客が二人いたものの、10坪くらいあるから窮屈感とは無縁だ。展望は西方面に関してはパンノンハルマ村を見下ろし、これまで丘の上の各所で見たものと大差ない。しかし東側に移動すると、これまで樹木に遮られて見ることのできなかった田園風景が地平線まで続いていた。

東北東の遙か彼方に霞みながらも20基ほどの発電用風車が見えた。グーグルの地図(航空写真)で調べたところ、20キロほどの所にあるものらしい。ハンガリーで初めて見る風力発電施設なので若干興奮する。しかしハンガリーの風力発電比率は全体の0.5%で日本の0.2%より多い(P.4参照)。もっとも総発電量が桁違いに少ないから絶対量では日本の1割くらいになってしまうのだが。



展望台から聖母教会とその背後に修道院の鐘楼。

展望台を降りると1時を廻っていた。この界限で他に見所としてはツーリストセンターから少し東

へ下ったところにガラス工芸品のギャラリーがあるらしい。しかしあまり興味も湧かないまま、丘を下って宿の食堂で昼飯を摂ることにした。

この日の献立はグヤーシュ、店特製サラダ、七面鳥の胸肉にした。すぐ運ばれてきたグヤーシュを見て失敗したと思う。量が多すぎるのだ。しかし今さら注文を変更も出来ず、ともかく撮影のために汁気を飲む。下からはたっぷりの具材が姿を現した。これだけで昼食として私には十分な量だ。

しばらくしてサラダが登場する。これまた日本だったら二人前として通用するだろう。ヨーグルト系のドレッシングは野菜との相性も良かったが、いくら食べても減らないような気がする。



上:グヤーシュ。供されたときは汁気が表面まで満たされていた。具のあれこれが判るようと汁気を先に飲み干してから撮影。下:オリジナル特製サラダ。

10分遅れで七面鳥が供されると、とどめを刺されたような気分になる。しかし出された食べ物を残さないのは主義と云うより今や体質になっている。それも自ら注文したものならばなおさらだ。ともかく時間をかけて少しずつ胃の腑に流し込んだ。

肉の上に乗せられたチーズに降りかけられたパプリカは色鮮やかだが辛さは感じない。チーズとベーコンが七面鳥の淡泊さを補って美味い。しかしせっかくの美味を量ゆえに楽しめないのが口惜しい。せめてグヤーシュを頼まなければ良かった。昨日、スープとサラダ、メインがあっさり片付いたのでこの食堂を甘く見たのが敗因だ。

最後は胸突き八丁を這い上るような気分で食事を終える。ともかく総ての皿が片付いたものの、さすがにパンはスープと共に1枚食べたのみで残した。頼まなければ良かったのだけれど、注文を取りに来たオヤジが最後に、「パンは？」と訊いたので考えもなく頷いてしまった。

勘定はグヤーシュ850Ft(312円)、パン50Ft(18円)、サラダ990Ft(364円)、七面鳥1,100Ft(404円)、ワイン2,600Ft(955円)だった。部屋へ戻ってベッドに身を投げ出す。

電話で宿予約

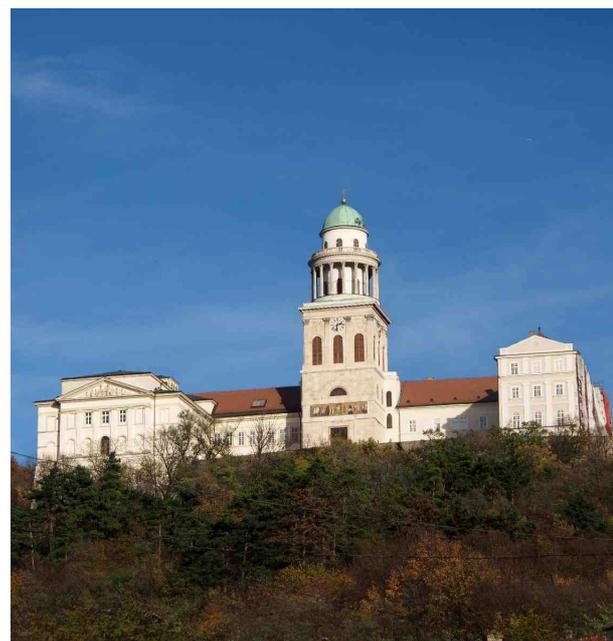
食べ過ぎによる不調は尾を引き、結局この日は再び外出することもなく過ごした。夕方になって明日向かうショプロンの宿を予約しなければならないことに気付いた。いつものように宿のフロントで頼もうとしたが、(あるとして)フロントがどこなのか判らない。私が泊まっている棟にないことは確かで、食堂のある棟には客室もあるようだが入り口が判らない。

諦めて自力で電話することにしたが、部屋に電話設備はない。携帯電話でトライしたが繋がらないのでドコモに問い合わせるが、海外の電話事情に関する情報はさっぱりなようで良いアドバイスもない。

晩酌を始めたものの胃袋が渋滞していて、酒でさえあまり進んで行かない。結局定量の半分くらいで終わりにし就寝した。一旦寝てから思い付き、日ガイドを調べて、「市外局番の前に06を付ける。」ことを見付けて何とか8時頃に電話は繋がった。しかし外国語はドイツ語だけのようで予約はできない。諦めて翌日の朝食時、宿の人間に頼むことにした。



上:七面鳥胸肉。
下:表面のチーズを剥ぎ、肉を切り分けた状態で撮影。



食堂から部屋へ戻るとき、見上げるとすっかり晴れ上がった紺碧の空を背景に修道院の鐘楼が聳えていた。